



公社の高齢者向け情報誌【シニアライフ】

SENIOR LIFE

特集「文楽人形の美しさ」





特集「文楽人形の美しさ」

文楽人形はもう人形ではありません。特に女方の人形の可憐さ、美しさは震えるほどで、観る人の心を掴んで離さない魔力と魅力があります。その人形に魂を吹き込む人形遣いをご紹介しますので、この機会に歳を重ねたからこそ楽しめる文楽に親しんでみてはいかがでしょうか。

写真 渡邊肇 構成 嶋田淳子



案内人：渡邊幸裕（株式会社ギリ代表）

サントリー宣伝部、TBS プリタニカ Pen 編集部等を経て 2001 年ビジネスコーディネータとして独立。文楽界と密接な関係を持ちイベントを多数手がける。文楽ポータルサイト「楽文楽」編集長、産経新聞英文サイト「JAPAN Forward」編集企画アドバイザー、神田明神文化交流館「edocco club」主宰などを通じ、日本文化超初心者向けの記事、セミナー、観劇会等を展開中。



絵本太功記 尼ヶ崎の段 武智光秀 人形遣い 吉田玉男
寛政11年(1799年)に流行していた太閤・豊臣秀吉一代記の読本を浄瑠璃化。明智光秀(作中では武智光秀)の「本能寺の変」前後、主君信長を討つ光秀の苦悩を描く。

文楽とは

人形浄瑠璃、通称“文楽”はユネスコの世界遺産に歌舞伎より先に登録されたほど評価の高い、日本の誇る芸能です。台詞に節をつけて語る「浄瑠璃」と、その物語を演じる「人形」が結びついたので文楽であり、楽しめる要素が多いのも特徴ですが、初めて文楽をご覧になった方が口を揃えておっしゃるのは、「こんな世界があったのか!」と。その内容、芸術性、技術に圧倒され、「人形劇に泣かされた」と多くの方が驚かれます。

残念な事に2018年は太夫の竹本住太夫氏、三味線の鶴澤寛治氏と巨匠を失う年となりましたが、初心者目の目にまず飛び込んでくる人形の美しさを知り、人間国宝の人形遣い吉田簀助師匠の話も含め文楽の素敵なお世界にお近づき下さい。歌舞伎三大名作と言われている「菅原伝授手習

鑑」「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」は全て文楽が原作、ある意味文楽は歌舞伎の親芸なのです。外国の人形劇は子供向けのものが多いのですが、文楽は成り立ちから言っても全く様相が異なり、言ってみれば“大人の文楽”なのです。

竹本義太夫

室町時代に流行った浄瑠璃姫伝説から、語り物は浄瑠璃と呼ばれ様々な流派がありました。江戸時代初期の大阪(当時は大坂)、竹本義太夫がこれを集大成して打ち立てたのが「義太夫節」、人形劇と合体して出来たのが人形浄瑠璃です。竹本義太夫率いる竹本座が今の文楽の基礎を作り、後に興った豊竹座と芸風を競い合い、歌舞伎を圧倒するほどの人気でした。

その後、三人遣いの工夫なども相まって、“大人の文楽”は大変隆盛を誇りましたが、やがて



「アノ物音は敵か味方か。勝利如何に」と松の上に登ると、そこには敵方の豊臣秀吉(作中では真柴久吉)が光秀を討取ろうと、多数の軍勢と共に迫って来ている。



義経千本桜 渡海屋・大物浦の段 碇知盛 人形遣い 吉田玉男
碇を持ち上げる知盛を三人の人形遣いが操る。知盛が義経を討とうとするが果たせず、碇綱を体に巻付け岩の上から入水しようとする壮絶な場面。

衰退していきます。

江戸後期に現れたのが淡路出身の興行師、植村文楽軒(うえむらぶんらくけん)。彼が人形浄瑠璃を建て直したので「文楽」が人形浄瑠璃の代名詞となり、人形+浄瑠璃=「文楽」となり、現在でもそう呼ばれています。

三人遣い

他の人形劇同様、文楽人形も当初は一人で一体を遣う形式でしたが、その後一体を三人で遣う、他にはない形式になりました。大きな人形にしてより楽しんで貰う為、芝居小屋を広くして客数を増やす為など諸説ありますが、三人遣いだから出来る事が沢山あります。

首(かしら)と呼ばれる頭部と右手を主遣い、左手を左遣い、足遣いと、三名で分担しますが、主遣いの指令の元、全く自然な動きで、人間より人間らしく、優雅、可憐、勇壮、、、人間に出来る事は全て出来、出来ない事も出来ます。

若手人形遣いの修業は足遣いから始まり、足で10年、左遣いになって10年から15年、主遣いをやらせてもらえるのは入門20年以上たってからです。主役級の人形が遣えるには更に時間が必要で、サラリーマンなら定年になった頃やっと良い

役が回ってくる、そして目指すは人間国宝、という大変の長い世界です。

加えて人形遣いを支える裏方の仕事があります。首(かしら)や床山、人形衣装など、それぞれのプロの仕事のおかげで、舞台上の人形は益々輝き、素晴らしい芸を見せてくれます。

太夫と三味線

文楽をリードするのは太夫と三味線です。正面に向かい右側にある床と呼ばれる場所で語られる義太夫節、それに合わせ人形は無言で演じます。

太夫は登場人物の台詞、情景や感情を語りますが、汗を流し、時に女性の声、子供の声と大活躍、文楽は聴きに行く芸能と言われているのがよく分かります。ちなみにこれは江戸時代の大坂言葉そのままです。

太夫の横で静かに座っている三味線は決してただの伴奏ではありません。時に打楽器にもなる太棹三味線を華麗に弾きこなし、撥(ばち)ひとつで様々な情景や心理描写などを表現、時には太夫をリードして上手く語らせる大切な役目でもあります。

「太夫がへたくそだと人形がバラバラになります」ある人形遣いさんが言っていました。物語を引っ張る太夫と三味線、その出来によって人形が変わると言っても過言ではありません。文楽は三業一体の総合芸術と言われる所以でもあります。



左 豊竹呂勢太夫、右 三味線 鶴澤燕三

もう一人の立役者 近松門左衛門

竹本義太夫と共に文楽を打ち立てたもう一人が、竹本座の座付作家の近松門左衛門です。東洋のシェイクスピアとも呼ばれる大作家がいなければ文楽はこんなに隆盛を極めなかったでしょう。

近松作とされる浄瑠璃は110作品ほど、そのうち24作が世話物です。世話物とは江戸時代における現代劇ともいべき作品群で、時代物と呼ばれる、それ以前の時代を舞台に展開する劇と明確に区別されています。

近松の世話物から江戸時代、特に大坂の庶民の生活を知る事が出来ます。そこに繰り広げられる男女、親子、家族、友人、武士の主従関係などの人間模様からは現代を生きる我々に通じるものが多々あり、身につまされて涙する事も多いのです。今とは異なる封建時代だからこそ起きる理不尽な事からは、その時代の日本人の価値観や人生観、宗教観なども感じられます。

近松の文章は語りにくいという太夫もいますが、何と言っても名文ばかりです。文楽のプログラムには「床本」という小さな本が付いていますが、これを読むと近松文学の本質が垣間見えます。1月の大阪で「冥途の飛脚」が上演されますので興味のある方はぜひ行かれて下さい。



曾根崎心中 天満屋の段
左 鬻油屋手代 徳兵衛 人形遣い 桐竹勘十郎
右 遊女 お初 人形遣い 吉田賛助



天満屋の軒下に隠れる徳兵衛は、友人の油屋九平次による騙り（詐欺）の罠にはめられた。もう大坂の地では生きてはゆけないと、お初の足を小刀に見立て、のど元に当てて心中を決意する。

代表的な近松作品

『出世景清』	貞享2年(1685年)
『曾根崎心中』	元禄16年(1703年)
『碁盤太平記』	宝永7年(1710年)
『冥途の飛脚』	正徳元年(1711年)
『国性爺合戦』	正徳5年(1715年)
『平家女護島』	享保4年(1719年)
『心中天網島』	享保5年(1720年)
『女殺油地獄』	享保6年(1721年)

曾根崎心中

近松の世話物代表作の一つが『曾根崎心中』です。実際に大坂で起きた男女の情死事件を取材し、その一か月後に浄瑠璃で描いて舞台化、これが大受けを受けて、竹本座にあった膨大な借金

を返済してしまう程の大ヒットだったと言われています。

若い二人が死に向かう場面、道行(みちゆき)と言いますが、ここの文章が本当に名文であり大阪国立文楽劇場の入口に展示されているほどです。「此の世のなごり、夜もなごり、死にに行く身をたとふれば、あだしが原の道の霜」で始まり、「未来成仏うたがひなき恋の手本となりにけり」で終わっています。この名文で日本人には近松門左衛門の才能を感じて、文楽を認識して頂きたいです。

文楽人形の凄さ

文楽作品の中には登場人物が命を落とす場面があります。観客が固唾を飲んで見守る中その時が来ます。こと切れるのです。その時人形遣いはすっと引っ込んでしまい、舞台には魂が残っていない人形が置かれています。本当に死んだのです。

芝居や映画、ドラマでは役者が死んだふりをしているのは誰でも知っていますが、文楽人形は本当に死んでいるのです。ピクリともしない人形が舞台上に残されている時間はそんなに長くありませんが、実に長く感じます。それだけ真に迫る遣い方をするのが人形遣いの技であり、観客は引き込まれてしまうのです。

すねる、甘える、子供を愛する、心配する、叱咤激励する、決心を迫る、威張る、ふてくされる、キレる、おどける、、、様々な場面からこんな表情を見せられると、人間を観ている気になります。そして遣っている人形遣いの顔が消えてしまうのです。

人形遣いは作品の本は全部読み込んでおり、自分が遣っている登場人物の性格、立場、状況、心理状態などを把握し、その役になりきり、でも無表情に淡々と、客の心にそれらを届けようとして遣っています。そうする



死に場所を求め、天神の森へと向かう二人。橋の下には蜷川が流れる。

と人生経験を積んだ方でも泣いてしまうのです。人形劇なのに。

太夫、三味線の語る義太夫節、優雅で華麗な人形、真剣に楽しむ観客、映像では決して分からない迫力が小屋の中にあります。映像やスマホのエンターテインメント時代ですが、生の舞台でしか味わえない世界がそこにあります。先人が支え、継承してきた文化を次世代に伝えていくのが、この時代を生きる人間の役目だと思いますが、この価値が分かるのはあくまでも大人です。

趣味は人それぞれ、自分の好みで決めるものですが、何かのきっかけで目覚めます。文楽好きとしては、これを機に一回ご覧になって頂ければと思います。文楽人形を知り、文楽の中に身を置いて素晴らしさに触れて頂ければと思います。

吉田簀助師匠 特別インタビュー

登場すると拍手が巻き起こり、場内の空気が一変します。女方の人形を遣わせたら天下一品、人間国宝・人形遣い吉田簀助師匠の貴重なインタビューです。

単に木を削り装飾しただけの木偶（でく）の坊の人形ですが、人形遣いによって魂が吹き込まれます。傍から見つめられると怖いほどです。人形遣いの頂点に立つ名人簀助師匠、芸歴78年の言葉に重みがあります。

シニアライフの読者へのメッセージも頂戴しました。（聞き手：渡辺幸裕）

—文楽の魅力はどんなところにありますか？

太夫、三味線、人形の三業が息を合わせ、人形も主遣い、左遣い、足遣いの気持ちをひとつに合せて舞台を創り上げるところだと思います。



艶容女舞衣 酒屋の段 お園
妻の女との死を決意した、夫半七からの手紙を読むお園。そこには「未来は必ず夫婦」の文字が。



文楽人形遣い 人間国宝三世吉田簀助
1940年三代目吉田文五郎に入門。1942年桐竹紋二郎を名乗る。1961年6月三代目吉田簀助を襲名。1970年に芸術選奨新人賞を受賞。1994年に人間国宝に認定。1995年NHK放送文化賞を受賞、1996年には紫綬褒章、1997年には日本芸術院賞を受賞。2007年にはフランス政府より芸術文化勲章コマンドゥールを叙勲。2009年文化功労者、2012年日本芸術院会員。

—文楽人形の美しさとは、どこにあるのでしょうか。

人形劇は世界中にあります。三人で一体の人形を動かすのはまれです。人形を媒体にし、人の情をこれほど繊細に表現する芸能は、他に例を見ないでしょう。

—人形を観る時、より楽しむ為の要素はどこでしょうか。

まずは自分が好きな登場人物を見つけて、その人形の動きや、表情に注目してみたいでしょうか。肩の動きや目線、指先などのちょっとした動きで、まるで女優のように喜怒哀楽を表現している事に驚かれるかと思います。

最初は人形よりも、顔を出して人形を遣う主遣

いの方が気になるかも知れませんが、だんだん慣れて感情移入出来るようになると、人形遣いの存在が消えて人形だけに目がいくようになり、人形が演じる物語の世界に深く入り込んでいけるようになるかと思っています。

—人形を遣う時何を考え、注意されて遣っていますか。

舞台では役の心になりきっています。人形の姿を借りて、自分がその役を演じている…という感覚です。また、主遣いとしての責任はもちろん、人形の左遣い、足遣いは、いわば私の分身ですので、分身との「共演」なくしては私の人形は存在しないと思っています。例えば私がせっかく懐手をして、肩をしなやかに出来たと思っても、左遣いがバランスを保ち、足遣いの裾さばきも伴ってくれないことには、なんにもなりません。

—お弟子さんにどんな指導をされていますか。芸は教えられるものではなく、言葉は悪いです

が、盗んで覚えるものです。しかも自分の技量分だけしか盗めないもので、段階を越えたことを教えられても分かりません。実際の公演の舞台が修業の場で、私が遣う人形の、左や足を勤めさせます。

—長年遣ってきたから言いたい事、伝えたい事を聞かせて下さい。

世の中の何がいかに進歩しようと、文楽の人形遣いの修業は自分で体得するしか有り得ません。そして先人たちがずっと支え、継承してきた芸を次の世代に伝えていくのが私に課せられた使命だと思っています。

—シニアライフ読者へのメッセージをお願いします。

私の芝居の原点は、客席との一体感だと思っています。

この感動のためなら、生まれ変わってもう一度、足遣いから始める長い修業をやり直してもいい。



写真集「簀助伝」 渡辺肇
文楽人形遣い三世吉田簀助の生きざまを撮りおろした写真と、簀助が語る珠玉の言葉を共鳴させ、一冊にまとめた写真集。文楽に一生を捧げた人間の、たゆまぬ努力と情熱。芸の神髄に迫ります。
8,800円(税別) amazonで購入可能。

私は、来世も人形遣いになります そのためにも、死ぬ迄修業をつづけます

文楽に親しむ入口にご案内

推薦！ 文楽を楽しむポータルサイト楽文楽(らぶんらく) <http://labunraku.jp/>

Love 文楽、文楽を楽しむという意味の楽文楽(らぶんらく)。この機会に、是非サイトを訪問してみてください。文楽を気軽に楽しめる内容が充実しており、文楽を学べるサイトリンク集 <http://labunraku.jp/learning/> とも繋がっています。

写真は楽文楽主催文楽ワークショップです。技芸員と話も出来、一気に文楽の距離が近くなる企画です。

また2月に行われる楽文楽主催の赤坂文楽も文楽デビューに最適な公演です。詳細は下記です。



楽文楽主催 ら文楽さろん/實相寺
 伊達娘恋緋鹿子 火の見櫓の段 八百屋お七
 人形遣い 吉田簀紫郎

推薦公演 赤坂文楽# 20 文楽 体験講座と名作鑑賞

●日時：2019年2月19日

16:00 第一部 文楽体験講座(文楽三味線)

太棹三味線の魅力、お稽古の仕方など、実演を交えての講座です。

出演 鶴澤藤蔵、鶴澤清志郎、鶴澤清公

19:00 第二部 人形浄瑠璃名作鑑賞「生写朝顔話 宿屋の段/大井川の段」

文楽のお話 葛西聖司 ~生写朝顔話のみどころ~ 出演者トーク

生写朝顔話 宿屋の段/大井川の段【字幕付き】

出演 豊竹呂勢太夫、鶴澤藤蔵、吉田玉助、吉田一輔 他

●料金 第一部：1,000円 第二部 3,500円

●問い合わせ Confetti(カンフェティ) 0120-240-540 (平日 10:00-18:00)

推薦！ 参考書籍・DVD

「文楽のすゝめ」竹本織太夫(実業之日本社)

「文楽へようこそ」桐竹勘十郎、吉田玉女(小学館)

「週刊誌記者 近松門左衛門」小野幸恵(文春新書)

それぞれ読み物としても大変面白く、文楽初心者に最適です。

NHKからは文楽のDVD作品が20タイトルほど発売中です。今回触れた近松作品も多数あります。

●大阪の国立文楽劇場では6月、東京の国立劇場では12月、文楽入門に最適な鑑賞教室が行われます。サイトでご確認の上劇場デビューして下さい。

これらの情報を元に、ぜひ文楽に近づき親しんで頂き、日本人に生まれた事をお喜び下さい。